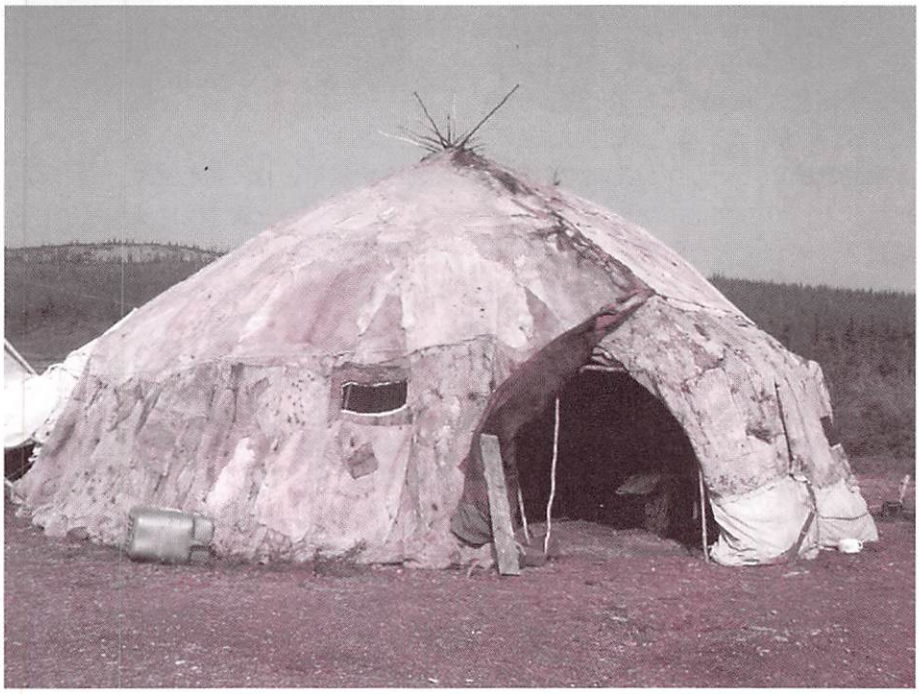
ISSN 0917−4729

北方民族博物館だより

No.62



H17.1
夏用テント　（コリヤーク）
Xechcho Vasilij G'ivilovich　1985年頃製作
ロシア／マガダン州／セヴェロ＝エヴェンスク地区／
大アウランジャヤ川／No13.ブリガード
（写真撮影：呉人惠）

木製の骨組みにトナカイ毛皮製のカバーをかけたもの。骨組みは二段階になっており、下段は脚立と横木が合わさったような骨組みで、これに上段の骨組み（木製の棒）を結びつける形になっている。一般的な大きさのテントの場合、内部にはさらに３、４のトナカイ毛皮製の小型テント（とばり）が骨組みに取り付けられる。この資料では外カバーに約60枚のトナカイ毛皮が使われている。

1　夏用テント
2　第21回特別展　『コリヤークーツンドラの開拓者たち』
3　講演会『コリヤークのことばと文化』
4　講座『北太平洋地域の踊りと音』
5　アイヌ文化講習会『かご編み（コイリング）を学ぼう』／サハ訪問記
6　INFORMATION

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

第21回特別展 環北太平洋の文化Ⅰ

『コリヤーク－ツンドラの開拓者たち』

2006. 7. 15 - 10. 9

北方民族博物館では、今年から４年間にわたり、特に日本との関係が深い環北太平洋地域の文化を特別展で取り上げることになりました。第１回目のテーマは、カムチャツカ半島北部からマガダン州北東部にかけて居住してきたコリヤークの文化です。

ここ数年、収集に力を入れてきた結果、当館のコリヤーク資料のコレクションは、国内最大級の規模になりました。本特別展は、このコリヤーク・コレクションの一部を公開するものでもありました。

＊　＊　＊

コリヤークは、おもな生業の違いから、海岸コリヤーク、トナカイ・コリヤークの二つに分けられます。本特別展では、まずこの二つのグループの生活の違いを紹介しています。

海岸コリヤーク

海岸コリヤークは、おもに海岸地域で漁撈（ろう）や海獣狩猟などに従事してきました。川を遡上（そじょう）するサケ類を大量に捕獲、乾燥し、年間を通して食物、あるいはイヌ橇（ぞり）用のイヌの餌（えさ）としてもちいました。また、アザラシ類やシロイルカを捕獲し、その肉や脂肪は食用に、アザラシの皮は紐（ひも）や靴などの材料にしていました。

このコーナーでは、鉤銛（かぎもり）の銛先や網などの漁撈具、海獣狩猟用の銛、そしてアザラシ皮製の衣類やブーツなどをご覧いただきました。また、海岸コリヤークの半地下式住居とそこに暮らす人びとの生活を再現した模型の展示もおこないました。

展示解説会の様子

ツンドラの開拓者たち－トナカイ・コリヤーク

トナカイ・コリヤークにとってトナカイは、肉や毛皮など生活に必要な物資をもたらしてくれる不可欠な存在でした。また、トナカイ橇は、移動や輸送の手段として重要な役割を果たしていました。

本コーナーでは、トナカイ毛皮製の帽子や上衣、手袋などの衣類、トナカイ橇、遊牧に使う投げ縄などを展示しました。また、本特別展の目玉資料として、木製の骨組をトナカイ毛皮製のカバーで覆った夏用テント「ジャジャーガ」を展示室内に組み立てました。（表紙参照）

女性の仕事：採集・かご編み・皮なめし

植物の根や茎、漿果（しょうか）（ベリー）類などの採集は、女性の仕事でした。植物性の素材は食用のほか、かごやバッグなどを編む材料としても利用されていました。毛皮を柔らかく加工する「皮なめし」も女性の重要な仕事でした。

本コーナーでは、針入れ、皮なめし具といった道具類やハマニンニク製のかご、なめしたトナカイ皮など、女性の仕事に関係する資料を中心に紹介しました。

コリヤークの衣類と装飾、精神世界

衣類と装飾のコーナーでは、特に飾り房などが付けられた美しい晴れ着類、頭飾り、ビーズ細工などの装飾品を展示しました。

また、精神世界のコーナーでは、トナカイ皮製太鼓、儀礼の際に新しい火を起こすための聖なる火錐板（ひきりいた）、トナカイの群を護るまじない具などの儀礼具のほか、トナカイ・コリヤークの死者用衣類を展示しました。

これらの実物資料のほか、海岸コリヤークの現代の生活とジャジャーガを組み立てる場面を撮影した二本の映像展示、固有の言語を紹介するパソコンを用いた展示もおこないました。また、コリヤークの民族衣装を試着したり、記念撮影することができるよう、体験コーナーを設けました。

コリヤークの生活は、社会主義時代やその後の民主化によって大きく変化し、長い間受け継がれてきた独自の文化が失われつつあります。この特別展を通じて、我々の隣人でもあるコリヤークの文化について、少しでも関心を持っていただくことができたのではないかと思っています。

謝辞

本展示を開催するにあたり、次の個人および団体より、資料の収集、写真や情報の提供等につきましてご協力いただきました。ここに記して感謝いたします。

大島稔氏、呉人惠氏、永山ゆかり氏、池田貴夫氏、松下明子氏、共同通信社

（学芸グループ　中田篤）

講演会

『コリヤークのことばと文化』

2006. 7. 15

講師　呉人　惠氏（富山大学教授）

講師の呉人氏は、10年以上にわたりトナカイ・コリヤークの言葉を研究されてきた言語学者です。本講演会では、言葉のなかに文化がどのように投影されるのかという点を中心に、現在コリヤーク語が置かれている状況についてもお話しいただきました。

呉人氏の調査地であるロシア・マガダン州北東部では、トナカイ・コリヤークの人びとが、厳しい環境の下、トナカイ遊牧と漁撈や狩猟、植物採集を組み合わせた多層的な文化を形成してきました。

トナカイ・コリヤークは、トナカイに関わるさまざまな言葉を生み出してきました。トナカイには、年齢や性別、毛色などによってさまざまな名前がつけられます。特に橇牽引（けんいん）用トナカイは、人とのかかわりが濃厚であるため、特徴的な名前がつけられてきました。

「鼻面の白い」など体や行動の特徴に基づくもののほか、「橇の敷物」、「山の斜面」など変わった名前もみられます。「山の斜面」は、そのトナカイが「山の斜面でロープに絡（から）まった」という出来事に由来しています。つまりこうした名前は、そのトナカイに関する情報や知識を覚えておくための「ラベル」として、事物や地形名が刻み込まれたものなのです。

一方、人名の名付け方にも特徴があります。現代のコリヤークは、ロシア式とコリヤーク式の２つの名前を持っています。子どもにコリヤーク式の名前を付ける時には、特殊能力を持った人が占い石という道具を使い、先人たちの名前のなかから適当なものを選びます。こうした名付け方は、子どもが祖先の生まれ変わりであるという再生観念に基づいています。

ところが近年、トナカイの名前はロシア語からの借用語、しかもペットに対するような単純なものに変化しています。また人名についても、コリヤーク式の名付けが失われつつあります。こうした状況は、記号としてのコリヤーク語だけでなく、言葉に刻み込まれた民族固有の知識や情報、そして生や死など人の経験に対する固有の考え方の喪失をも意味しているのです。

（学芸グループ　中田篤）

講座

『北太平洋地域の踊りと音』

2006. 7. 16

講師　大島　稔 氏（小樽商科大学教授）
甲地　利恵氏
（道立アイヌ民族文化研究センター研究職員）

当講座は７月15日から始まった特別展「環北太平洋の文化Ⅰ　コリヤークーツンドラの開拓者たちー」の関連事業として、カムチャツカの先住民コリヤークの伝統的な歌、踊り、太鼓演奏などの特徴について、アイヌをはじめ周辺民族との比較を交え紹介することを目的として開催されました。

講師はお二人とも長年にわって北東アジアの先住民の歌や踊り、儀礼について調査をされてきた専門家です。以下にそれぞれの講演の概要を紹介します。

甲地利恵氏
「北方の音に聴く・声の彩り・響きの加工」

北方諸民族の音楽の特徴は、太鼓を楽器として使うこと、シャマニズムに基づく儀礼と密接な関係をもつものがみられること、他人は歌うことができない「自分の歌」あるいは「家族の歌」があること、動物の鳴き声やしぐさの模倣、歌や太鼓、踊りの競い合いといったことが顕著にみられることである。

そしてこれら北方の歌には多彩な声の発声方法と技巧がみられることも指摘したい。高い裏声と低く唸るような声、息を吸う音と息を吐く音、舌、口蓋垂（のどびこ）をふるわせる音、そしてこれらの対立的な要素の声を連続的に組み合わせる発声と技法がある。

さらに、思いもよらない声の響かせ方がある。その一つには二人が口を開けて向かい合い、相手の口腔（こうこう）に声を発してこもった音を響かせ、競い合う「喉（のど）鳴らし」がある。また、複数の歌い手が同じメロディーを、時間をずらして歌う歌い方がある。例えば一人ずつ高い声と低い声を交互に歌いながら時間をずらすと、高い声のメロディーと低い声のメロディーが同時に歌われているように聞こえる。

後半は、こうした北方の音楽の実際を、調査で撮影、採録された映像や音声を用いて解説された。

大島　稔氏「コリヤークの太鼓歌と踊り」

太鼓は北方の歌や踊り、儀礼に欠かせない楽器である。北方の太鼓は片側にトナカイ皮などを張った一面太鼓で、その木枠は曲げ物細工によって作られる。コリヤークにとって太鼓は神聖な楽器で、持ち歩くときや住居の中に安置する際にも専用の革袋に収めておく。儀礼の場に欠かせない楽器であるが、太鼓がない場合には手拍子がその代わりとなることもある。

海岸コリヤークの伝統的なアザラシ送り儀礼である「ホロロ祭」に参加する機会があった。この祭では踊りや太鼓が重要な役割をはたす。最初に狩猟で獲ったアザラシの魂を海へ送り返すための特別の料理「トルクーシャ」を準備する。そして獲ったアザラシの数の２倍の木偶を用意して、料理を食べさせ、それを火にくべる。伝統衣装で着飾った女性たちが海の方へ向き、太鼓の無い、海の波を表す踊りで海に旅立つアザラシの霊を送る。アザラシの霊が海に帰ったと判断すると、「ホロロー」の叫び声とともに踊り手は反対側を向いて太鼓のリズムで力強く踊り始める。そして「トルクーシャ」を全員で味わいながら祭は続く。

（学芸グループ　渡部　裕）

アイヌ文化講習会

『かご編み(コイリング)を学ぼう』

2006. 7. 22

講師　知里　眞希氏（クラフトデザイナー）

アイヌの工芸品として多種の編物が知られていますが、千島列島方面にはテンキと呼ばれるかご細工がありました。これはテンキグサ（ハマニンニク）の葉を編んだもので、古くは江戸時代の文献にも記されており、実物も博物館などに残されています。しかし、その製作技術は伝わっていませんでした。

講師の知里さんは近年この技術を復元され、さまざまなタイプのテンキを製作し、また、講習会等で作り方の指導を行ってこられました。

今回は、テンキグサが用意できなかったため、園芸用のラフィア（ヤシ科植物）繊維を使い、コイリングという編み方を学ぶのを目的としました。アイヌのテンキも多くがコイリング技法で作られています。この技法は、繊維を束ねた芯（しん）のまわりを針に通した別の繊維でコイル状に巻いて、中心から外側へと渦巻きのように編み進めていくものです。このとき内側（前）の段の芯を薄くすくいながら、外側の芯を巻き留めていきます。

編み始め部分を講師に実演していただいた後、参加者は実際に編みながら、コツなどを教えていただきました。直径10cmほどのコースターをめざしてそれぞれが取り組み、3時間弱で早い方はほぼ完成に近い大きさまで編み上げました。巻き終わりの処理法を教えてもらい、各自で仕上げていただくようにしました。

テンキグサは他のイネ科植物と同様、葉が幾重にも巻いた状態になっています。それを外側からはいでゆき、コイリングには芯のほうの柔らかい葉を使います。講師と一緒に採っておいたテンキグサの葉を手にとったり、見本として用意していだいたテンキグサ製のかごの続きを編んでみたりと、本物のテンキグサの感触も確かめてもらいました。

来年は素材を刈るところから始め、本物のテンキに挑戦してみたいと考えています。

（学芸グループ　齋藤　玲子）

訪問記

『サハ訪問報告』

2006. 6. 18 － 6. 28

平成18年６月18日（日）から６月28日（水）までの11日間にわたって、谷本一之館長・椎名惟義副館長とともに、ロシアのサハ共和国を訪問しました。

今回の訪問は、昨年当館がロシア・サハ共和国の国立ヤクーツク北方民族歴史・文化博物館（以下歴史・文化博物館）と学術交流を促進させるために協定を交わしたことが直接のきっかけとなって実現しました。今後当館と歴史・文化博物館の間で、具体的にどのような交流が可能なのかを協議しに当地を訪ねました。

首都ヤクーツクでは歴史・文化博物館の常設展示や収蔵庫、その他周辺博物館を視察しました。歴史・文化博物館では主に数万年前のマンモスやウマ、ウシ等の骨格標本、V.N.ヴァシリーエフ（1877年-1931年）が収集した北方民族のコレクションの見学に時間をかけました。永久凍土帯から掘り出したマンモスの骨や牙（きば）は装飾品や薬としての利用価値が高く、最近海外からの需要が多いという話をうかがいました。また、ヴァシリーエフの収集資料は合計で156点収集しているとのことでした。

これらは未だサハから国外へ持ち出されたことがないそうなので、いずれは当館が借用して日本で紹介できればと思います。

その他滞在期間がサハの正月（夏至を新年のはじまりとする）にあたっていたこともあり、「ウセフ（馬乳酒祭り）」と呼ばれる豊饒（ほうじょう）を祈願した祭りを見学することもできました。

滞在は約1週間という短さではありましたが、歴史・文化博物館関係者の計らいにより多くのことを見聞することが出来たと思います。今回の訪問を起点として、今後どのように博物館同士協同していくか、互いの意志疎通を密にすることでより親密な関係を築いていければと思います。

本訪問は岡田基金により行いました。

（学芸グループ　角達之助）

歴史・文化博物館常設展示室

INFORMATION

行事報告

◆7/15［土］『講習会：コリヤークのビーズ細工』

講師にコリヤーク文化伝承者のタチアナ・ニコラエヴナさん（写真中央）を迎え、コリヤークの伝統的な技法をつかってビーズ刺繍に取り組みました。

◆7/15［土］『展示解説会』

講師：中田篤（当館学芸員）

特別展の解説会を行いました。

◆7/29［土］、8/12［土］博物館クラブ土器作り（形づくり、野焼き）

講師：角　達之助（当館学芸員）

形作った土器を、道立オホーツク公園で野焼きして完成させました。

◆8/19［土］『講座：もう一つのトナカイ遊牧』

中田篤（当館学芸員）

特別展で扱ったコリヤークのトナカイ遊牧に比較してモンゴルのツァータンの遊牧を紹介しました。

出前事業

中田篤（当館学芸員）、佐々木智英（当館統括主査）が大空町立女満別小学校で出前授業を行いました。

モニター会議開催

◆平成18年度第１回モニター会議を７月28日に開催しました。モニターは、博物館利用者、学識経験者、学校関係者５名です。

出版

北方民族文化シンポジウム報告を中心に選定した、『環北太平洋の環境と文化』（Ａ５判312頁）を発行しました。発行は岡田基金によりました。

第21回北方民族文化シンポジウム
北太平洋の文化：北方地域の博物館と民族文化

会場　オホーツク文化・交流センター
（網走市北２条西３丁目）

◆コンサート／北方の音楽「カンテレの調べ」

10月25日［水］午後６時30分～8時

エヴァ・アルクラ、aasian kukka（アアシアン　クッカ）（扇柳トール＋あらひろこ）

◆シンポジウム　11月４日［土］、５日［日］午前９時30分～

発表／庄司博史（国立民族学博物館）宮里孝生（野外民族博物館リトルワールド）S.ハーカソン（アルティーク博物館）長谷部一弘（市立函館博物館）呉人惠（富山大学）O.V.イェフィモヴァ（カムチャツカ州立博物館）内田祐一（帯広百年記念館）野本正博（アイヌ民族博物館）手塚薫（北海道開拓記念館）渡部裕、中田篤（当館）

平成17年度年報

平成17年度年報を発行しました。

北方民族博物館だより
No.62

平成18(2006)年９月30日発行
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042　北海道網走市字潮見309-1
電話 0152-45-3888　FAX 0152-45-3889
e-mail：tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者
財団法人北方文化振興協会